

英語における名詞化接尾辞 -ness の 拡張用法について

——コーパスを使用した調査——

小 松 千 明

1. はじめに

英語には、-ness, -ity, -th のような、形容詞に付加し抽象名詞を派生させる接辞が存在する。なかでも -ness は非常に生産力があり、ほかの名詞形による阻止がある場合を除き、ほとんどすべての形容詞に付加し、性質や状態を表す抽象名詞を派生させることができる。

-ness が付加する基体は、*kind, happy* のような単純語に限らず、*unwilling, problematical, homeless* のような派生形容詞や *open-minded, user-friendly, self-conscious* のような複合形容詞にも付加することができる。

このように、-ness はその形態や語種に関わらず、ほとんどすべての形容詞に付加することができる生産性の高い接辞であるが、条件が整えば、形容詞以外の要素にも付加することができる。例えば、次の例はアメリカ小説からの抜粋であるが、呼称を表す名詞に -ness がついた形が使われている。

- (1) Nana doesn't think she's old though. She refused to leave, talking about how it was her home and no thugs were gonna run her out, not even when somebody broke in and stole her television. About a month after that, Uncle Carlos claimed that he and Aunt Pam needed her help with their kids. Since, according to Nana, Aunt Pam "can't cook worth a damn for those poor babies" she finally agreed to move. Our house hasn't lost its Nana-ness though,

with its permanent odor of potpourri, flowered wallpaper, and hints of pink in almost every room. (Angie Thomas 2017, *The Hate U Give*, Walker Books, p. 305) (下線は筆者)

上記の例では、主人公が Nana と呼ぶ祖母のエピソード（気丈ではあるが高齢のために息子夫婦の家でありに引っ越すことになった）が述べられた後、「Nana（おばあちゃん）またはその家をもつ本質的な性質またはそこから醸し出される雰囲気」を表すのに *Nana-ness* という派生語が使われている。Nana の「自分を高齢だと思っていない気丈さ、どんな理由があっても自分の家を出ようとはしない頑固さをもちつつ、家族のためなら手助けを惜しまない優しさ」といった性格、性質を表す文脈が前にあり、当該の語のすぐ後には、「ポプリの香りが漂っている、花柄の壁紙である、ピンクの小物類が部屋のいたるところにある」といった具体的な Nana の家の特徴、特質を説明する表現が続いている。

英語では呼称を表す名詞以外にも、普通名詞、固有名詞、複合名詞、名詞句、前置詞（句）、副詞等のさまざまな要素に *-ness* が付加している例が観察される。Bauer et. al. (2013:246) はアメリカ英語のコーパス *Corpus of Contemporary American English (COCA)* を検索し、次のような様々な例が観察されることを指摘している。

(2) a. *-ness* on nouns and nominal compounds

ageness, airness, applesness, babeness, baseballness, birdness, celeb-ness, classness, cityness, cousin-ness, event-ness, factness, fadness, goatness, Ohioness, couch-potatoness, cross-borderness, holy-warness, homebodyness, hot-button-ness

b. *-ness* on phrases

at-homeness, day-to-dayness, don't-know-nothing-ness, down-to-earthness, every-girlness, getting-on-ness, never-give-upness, not-quite-myselfness, out-of-bodyness, in-chargeness, I-can-do-it-too-ness, take-it-for-grantedness, to-be-looked-at-ness, you-are-thereness

c. *-ness* on other categories

aboveness, aboutness, afterwardness, alwaysness, beforeness, beingness, comingness, itness, there-ness

このように、-ness は形容詞だけでなく、名詞、名詞句、前置詞、前置詞句など、様々な要素に拡張して付加することができる。こうした拡張タイプの -ness 派生語については、実例の指摘は散見されるものの、その詳細な使用実態はこれまであまり研究されてこなかった。そこで、本稿では、このような名詞化接辞 -ness の拡張用法について、英語の大規模コーパス *Corpus of Contemporary American English* (COCA) と *British National Corpus* (BNC) を用いて具体例を抽出し、その出現頻度や特徴について考察を行う。

2. データと調査方法

調査に使用するコーパスは COCA と BNC である。ともに ブリンガムヤング大学の Mark Davies によって CORPUS.BYU.EDU 上で公開されているコーパスと検索ツールを使用する。各コーパスの概要は下記の通りである。

表1 *Contemporary American English* (COCA) と *British National Corpus* (BNC)

名称	資料、構築、刊行の年代	資料の種類(ジャンル)と構成比	語数
COCA	1990 年～ 2017 年 (1 年ごとに 2000 万語ずつ収集)	Spoken: 20% Written: 80% Fiction, Popular magazines, Newspapers, Academic Texts から均等に採取	Spoken: 116,748,578 Written: 450,3605,170 Total: 570,353,748
BNC-BYU	1980 年代～ 1993 年	Spoken: 10% Written: 90% Fiction (17%) , Magazine (8%) , Newspaper (11%) , Non-academic (16%) , Academic (16%) , Miscellaneous (22%)	Spoken: 9,963,663 Written: 86,299,736 Total: 96,263,399

COCA は現代アメリカ英語のコーパスで、ウェブで取得できる 1990 年以降の言語資料からサンプルを収集している。ウェブで取得可能なものということで、話し言葉の資料は、放送番組のスクリプトを使用し、ABC, NBC, CBS, CNN, FOX, MSNBC, PBS, NPR, *Indep* 各局から均等にサンプルを採取している。書き言葉は、小説、雑誌、新聞、学術論文の 4 種から読者層や内容に偏りがないう配慮した上で、均等にサンプルを採取している。1990 年以降、現在に至るまで、毎年 2000 万語ずつデータを収集しており、現在、2017 年までに収集されたサンプルから成る約 5 億 7 千万語の規模のものが公開されている。

一方、BNC はイギリス英語のコーパスで、イギリス政府の資金援助を受けて、オックスフォード大学、ランカスター大学、ロングマン社などが加盟するコンソーシアムによって 1991 年から 1994 年にかけて構築が行われた。1995 年に欧州圏研究社向けに初版が、2001 年に世界中で利用可能な第二版が、2007 年には最新のデータ記録規格の XML に対応した第三版が刊行された。データ量は約 1 億語で、一般話者による自然会話を含む書き起こしデータを含む話し言葉のサンプル約 1000 万語も含まれる。

上記のコーパスから該当する派生語を抽出するために、CORPUS.BYU.EDU 上の検索ツールを使用した。この検索ツールは、ハイフンを認識し、またワイルドカード検索が可能であるので、*ness* 以外にハイフンとワイルドカード（アスタリスク記号）を含む検索文字列を使用した。ただし、これだけでは *McGuiness*, *Manness* などの固有名詞が少なからず混入するので、固有名詞を取り除く指定を行った。具体的には、**ness_nn**, **-ness_nn**, **-ness_nn**, **-*-ness_nn**, **-***-ness_nn**, **-***-*-ness_nn** の 6 タイプの検索文字列で検索を行った。なお、アスタリスクとハイフンの数をこれ以上増やしてもヒット数が増えなかったので、この 6 タイプまでとした。

3. コーパスの検索結果

下記の表に検索文字列と COCA, BNC それぞれのコーパスにおけるヒット

数をまとめた。この数はヒットしたタイプの数(unique forms)であって、トークンの数(total frequency)ではない。また、*nessを検索するとハイフンを1つまたそれ以上含むもの、すなわち*-*nessや*-*-*nessなどの検索でヒットするものも重複して混入するので、アスタリスクとハイフンの数が増えれば増えるほどヒット数が減っていくのは当然である。重複がある分、無駄な面もあるが、アスタリスクとハイフンの数を少しずつ増やしていくことにより、形態的複雑度とヒットする語のタイプや頻度との相関関係もみていくことにする。

表2 COCA と BNC における -ness を含む語のタイプ数

検索文字列	COCA	BNC
ness_nn	6316	2522
*_*ness_nn*	1655	425
*_*_*ness_nn*	176	26
*_*_*_*ness_nn*	29	6
*_*_*_*_*ness_nn*	5	1
*_*_*_*_*_*ness_nn*	2	0

なお、COCA は総語数が BNC の約 5.7 倍ある。従って、ヒット数は当然、COCA のほうが多くなり、単純に数を比較してもアメリカ英語とイギリス英語の違いを論じることができない。また、上記の数の中には、*business*, *harness*, *witness* のようなたまたま -ness を含み派生語とは分析できない語、*governess*, *lioness*, *baroness* のような別の派生接辞（女性化接辞）-ess を含む語、など調査対象ではない語も含まれることを断っておかなければならない。以下、3.1-3.6 では上記の文字列ごとの検索結果をまとめる。

3.1 *ness_nn*

COCA では、*ness_nn* でヒットするタイプ数は 6,313 例であるが、このうち、*business*, *witness*, *harness*, *eyewitness* の 4 例（当該の接辞を含む派生語とは分析できない）を除いて、頻度数が上位 50 位までの語を一覧にすると次の表のようになる。BNC との比較のため、頻度数は 100 万語あたりの

頻度数（PMW）を挙げる。

表3 COCA における *ness_nn* の検索 頻度数が上位 50 位以内の語の一覧

1	awareness	33.41	26	greatness	4.54
2	darkness	32.48	27	blindness	4.52
3	illness	30.52	28	richness	4.42
4	effectiveness	23.53	29	sweetness	4.19
5	fitness	22.94	30	blackness	4.18
6	consciousness	22.47	31	emptiness	3.99
7	happiness	17.96	32	usefulness	3.83
8	wilderness	17.42	33	homelessness	3.49
9	willingness	15.49	34	closeness	3.39
10	weakness	12.85	35	stillness	3.19
11	goodness	12.22	36	wellness	3.05
12	sadness	10.17	37	likeness	3.01
13	fairness	8.89	38	tenderness	3.00
14	madness	7.96	39	correctness	2.97
15	forgiveness	7.59	40	stiffness	2.89
16	readiness	6.90	41	toughness	2.76
17	loneliness	6.85	42	preparedness	2.73
18	openness	6.29	43	whiteness	2.72
19	kindness	6.21	44	uniqueness	2.56
20	sickness	5.93	45	responsiveness	2.54
21	brightness	5.63	46	giftedness	2.53
22	competitiveness	5.13	47	unwillingness	2.40
23	thickness	4.96	48	eagerness	2.21
24	seriousness	4.76	49	fondness	2.16
25	bitterness	4.59	50	appropriateness	2.14

上記の表にある派生語 50 例は、すべて基体が形容詞で、このうち基体が複合形容詞であるようなものは *effectiveness*, *willingness*, *competitiveness*, *usefulness*, *homelessness*, *preparedness*, *responsiveness*, *giftedness*, *unwillingness* の 9 例である。いずれの例もハイフンは含まない。

同様に、上位 500 例を目視で確認していくと、女性化接辞の -ess で終わる語 (*governess*, *baroness*, *lioness*, *deaconess*) , 固有名詞 *Preakness* と *Dungeness* (定冠詞 *the* が付加しているためにヒットしたと思われる) を除くほとんどすべての例について、基体は形容詞であった。一見、形容詞以外の基体に付加していると思われるのは、*nothingness* と *togetherness* の 2 件だけで、その出現頻度数は *nothingness* が 891 件、*togetherness* が 522 件

と高く、いずれも辞書の見出しにもなっている。なお、辞書の記述やそれに基づく考察は、後の4節で詳しく見る。

BNCについても同様に調査すると、頻度数において上位50位以内に入る語は、下記の表のとおりである。

表4 BNCにおける *ness_nn* の検索 頻度数が上位50位以内の語の一覧

1	awareness	35.17	26	brightness	3.91
2	illness	31.94	27	reasonableness	3.89
3	darkness	31.30	28	tenderness	3.64
4	consciousness	25.29	29	blackness	3.57
5	effectiveness	20.57	30	stillness	3.47
6	weakness	16.72	31	closeness	3.25
7	happiness	16.0	32	homelessness	3.22
8	goodness	14.29	33	unhappiness	3.16
9	sickness	11.86	34	nervousness	3.07
10	willingness	11.60	35	hardness	3.04
11	madness	7.67	36	emptiness	2.98
12	sadness	7.47	37	cleanliness	2.88
13	thickness	7.06	38	sweetness	2.86
14	fairness	7.96	39	greatness	2.81
15	kindness	6.85	40	tiredness	2.76
16	bitterness	6.70	41	unwillingness	2.70
17	wilderness	6.68	42	attractiveness	2.64
18	readiness	6.29	43	highness	2.54
19	loneliness	5.70	44	softness	2.45
20	seriousness	5.02	45	likeness	2.41
21	competitiveness	5.50	46	uniqueness	2.36
22	usefulness	5.02	47	fullness	2.33
23	openness	4.61	48	politeness	2.31
24	richness	4.01	49	stiffness	2.30
25	forgiveness	4.59	50	helplessness	2.27

COCAの場合と比べて、順序の差こそあれ、頻度数が上位に入る語はほとんど変わらない。すべて基体は形容詞で、ハイフンを含んだ例はない。アメリカ英語とイギリス英語の違いをしいてあげるならば、イギリスは王国だけあって、皇族に対する敬称である *highness* の頻度が高いということであろう。ちなみに BNC における *highness* の出現頻度数は 254 件で、このうちすべての語が皇族の敬称の意で使用されており、「高さ」の意味で使われているものはなかった。

頻度数が上位 500 位までの例をみても COCA と大差はなく、また、形容詞以外の基体に *-ness* が付加していると思われる例は、COCA と同様、*nothingness* と *togetherness* の 2 例であった。これらの語はアメリカ英語でもイギリス英語でもかなり定着している語といえる。

以上、使用頻度の高い *-ness* 派生語をみてきたが、逆に、使用頻度が 1 回だけの表現も多数見つかる。いわゆるナンスワードである。Bauer (1983:45) は “nonce formation” と呼び、これを “a new complex word coined by a speaker/writer on the spur of the moment to cover some immediate need” (話し手または書き手がその場の必要性を満たすためにとっさに造った新しい複雑語) と定義している。ナンスワードが多いということは、それだけ当該の接辞が新造力をもっていることを示す。*-ness* は繰り返し使われる既存の語の中だけでなく、必要に応じて新しい語を作り出すことができるということを示すからである。

COCA コーパスにおいて、上記の検索文字列でヒットする 6,316 タイプのうち約半数の 3,157 タイプが頻度 1 回だけのナンスワードであり、この中には、基体が形容詞以外のものが多数含まれる。以下に、*-ness* が形容詞以外の要素に付加し、ハイフンなしで使われているものの例を挙げる。

(3) 名詞 *+ness*

foodness, heatness, hockeyness, joyness, mindness, momness, morningness, octoberness, pc-ness, paperness, plantness, queenness, worldness

(4) 複合名詞 *+ness*

gangsterness

(5) 疑問詞 *+ness*

whenness, whoness

(6) 副詞 *+ness*

alwaysness

(7) 動詞 *+ness*

forgetness

BNC コーパスにおいても、頻度数 1 の用例は半数以上 (2522 例中 1050

例) を占めるが、ハイフンを含まず、形容詞以外の要素に *-ness* が付加しているものには、*choiceness*, *classiness*, *deathness*, *factness*, *godness* のような名詞 + *-ness* の形や *beyondness* のような前置詞 + *-ness* の形が観察される。

3.2 *-*ness_nn*

次に、検索文字列 *-*ness_nn* による検索結果についてみる。まず、対象語に絞って出現頻度の高いものから順に上位 50 位までを並べると下記の通りとなる。表 5 は COCA から、表 6 は BNC から抽出された語の一覧である。

表 5 COCA における *-*ness_nn* の検索 頻度数が上位 50 位以内の語の一覧

1	self-awareness	1.45	26	small-mindedness	0.04
2	self-consciousness	1.40	27	one-sidedness	0.04
3	cost-effectiveness	0.75	28	civic-mindedness	0.04
4	self-righteousness	0.36	29	heavy-handedness	0.04
5	single-mindedness	0.23	30	in-betweenness	0.04
6	open-mindedness	0.23	31	credit-worthiness	0.04
7	semi-darkness	0.17	32	half-darkness	0.04
8	self-centeredness	0.15	33	near-darkness	0.04
9	deaf-blindness	0.13	34	stick-to-itiveness	0.04
10	hyper-responsiveness	0.09	35	self-reflexiveness	0.03
11	light-headedness	0.09	36	price-responsiveness	0.03
12	narrow-mindedness	0.08	37	world-weariness	0.03
13	matter-of-factness	0.07	38	self-assuredness	0.03
14	left-handedness	0.07	39	l-ness	0.03
15	open-endedness	0.07	40	self-forgetfulness	0.03
16	user-friendliness	0.07	41	tough-mindedness	0.03
17	mean-spiritedness	0.07	42	busy-ness	0.03
18	short-sightedness	0.07	43	fair-mindedness	0.02
19	high-mindedness	0.06	44	Mexican-ness	0.02
20	self-destructiveness	0.05	45	dark-ness	0.02
21	even-handedness	0.05	46	near-sightedness	0.02
22	absent-mindedness	0.05	47	self-assertiveness	0.02
23	American-ness	0.04	48	sure-footedness	0.02
24	color-blindness	0.04	49	broad-mindedness	0.02
25	public-spiritedness	0.04	50	level-headedness	0.02

表6 BNCにおける **-ness_nn** の検索 頻度数が上位 50 位以内の語の一覧

1	self-consciousness	1.43	26	open-endedness	0.07
2	self-awareness	1.11	27	small-mindedness	0.07
3	cost-effectiveness	0.89	28	user-friendliness	0.07
4	self-righteousness	0.47	29	war-weariness	0.07
5	semi-darkness	0.46	30	warm-bloodedness	0.07
6	single-mindedness	0.43	31	well-formedness	0.07
7	short-sightedness	0.28	32	self-reflexive	0.06
8	bloody-mindedness	0.18	33	over-eagerness	0.06
9	credit-worthiness	0.17	34	fair-mindedness	0.06
10	god-consciousness	0.15	35	freedom-mindedness	0.06
11	self-centeredness	0.13	36	feeble-mindedness	0.06
12	absent-mindedness	0.12	37	far-sightedness	0.05
13	light-headedness	0.10	38	pig-headedness	0.05
14	even-handedness	0.10	39	non-seriousness	0.05
15	high-handedness	0.10	40	near-darkness	0.05
16	high-mindedness	0.10	41	self-assertiveness	0.05
17	half-darkness	0.09	42	sure-footedness	0.04
18	class-consciousness	0.09	43	two-facedness	0.04
19	other-worldliness	0.09	44	world-weariness	0.04
20	open-mindedness	0.08	45	near-nakedness	0.04
21	long-sightedness	0.08	46	light-heartedness	0.04
22	good-neighbourliness	0.08	47	open-handedness	0.04
23	left-handedness	0.07	48	half-heartedness	0.04
24	non-randomness	0.07	49	inter-connectedness	0.04
25	one-sidedness	0.07	50	inter-relatedness	0.04

この検索では、文字列にハイフンを含むため、「複合形容詞+ *-ness*」の形が多数見つかる。

これらの複合形容詞には、次のようないくつかのタイプがある。

(i) 「名詞+形容詞」型

意味的に左側にくる名詞（非主要部）が左側の形容詞（主要部）の補部として解釈されるタイプである。上記の表の中では、例えば、*self-aware*, *self-conscious*, *cost-effective*, *user-friendly*, *color-blind*, *world-weary*, *self-assertive* などがこれに該当する。

(ii) 「形容詞+名詞 *-ed*」型

右側の主要部が名詞+*-ed*の形をした派生形容詞であり、左側の形容詞（非主要部）は後続する名詞を修飾し、全体として、「～をもつ」という所有の意味を表す複合形容詞である。上記の表の中では、例えば、「～な心を

もつ」の意を表す *open-minded, single-minded, narrow-minded high-minded, absent-minded, small-minded, civic-minded, fair-minded, broad-minded* といった X-minded の形が多数みつかると、このほか、*light-headed, left-handed, short-sighted, public-spirited, one-sided, sure-footed* などもある。

(iii) 「形容詞＋形容詞」型

2つの形容詞から成り、意味的には等位接続詞の ‘and’ で結ばれたような関係を表す。上記の表の中では、*deaf-blind* のみがこれに該当する。

(iv) その他

semi-dark, half-dark, hyper-responsive のように左側にくる要素が主要部の形容詞の程度を表すタイプのもも表の中に観察される。

このように、検索文字列が **-ness_nn** の場合、頻度数が高いものの中には、基体が複合形容詞となっている例が多数みつかると、複合形容詞に混じって、COCA では基体が代名詞 (*I-ness*) や名詞句 (*matter-of-factness*) の場合や、BNC では名詞句に形容詞を派生させる *-ly* が付加し、それにさらに *-ness* が付加した形 (*other-worldliness, good-neighbourliness*) などが観察される。

また、出現頻度が1回のみのもは、COCA では1,655件中1,218件、BNC では425件中295件という、かなりの高い比率で出現頻度1回のナンスワードとなっている。次の例は、それぞれのコーパスでみつかると、*-ness* が形容詞以外の要素に付加し、ハイフンを1つだけ含んでいる出現頻度1の例である。
COCA

(8) 名詞

art-ness, boy-ness, guy-ness, past-ness, pc-ness, power-ness, ring-ness, star-ness, L.A.-ness, Africa-ness, Swiss-ness, 2000s-ness

(9) 名詞句

number-oneness, every-dayness, every-girlness, other-timeness

(10) 前置詞

about-ness, over-ness, for-ness, in-betweenness

(11) 前置詞句

in-commonness, in-placeness, in-shapeness, at-hominess, at-largeness, at-onceness

(12) その他

ain't-ness, just-rightness, not-yetness, too-lateness

BNC

(13) 名詞、代名詞

blue-ness, Bob-ness, I-ness, we-ness

(14) 副詞、前置詞、前置詞句、接続詞

alone-ness, out-ness, at-homeness, to-ness, if-ness

3.3 *-*-nn*

上記の文字列での検索でヒットする語は出現頻度数の低いものがほとんどであるので、下記の表では百万語あたりの頻度数に加えて、括弧の中に実際の出現頻度（粗頻度）を記す。

表7 COCA における *-*-nn* の頻度数（PMW と粗頻度）

1	matter-of-factness	0.07 (41)	26	stick-to-it-ness	0.00 (2)
2	stick-to-it-iveness	0.04 (20)	27	stick-to-it-iveness	0.00 (2)
3	with-it-ness	0.02 (11)	28	on-the-ball-ness	0.00 (1)
4	taken-for-grantedness	0.01 (6)	29	old-fashioned-ness	0.00 (1)
5	down-to-earthness	0.01 (5)	30	off-kilter-ness	0.00 (1)
6	just-so-ness	0.01 (5)	31	not-yet-here-ness	0.00 (1)
7	stick-to-it-iveness	0.01 (5)	32	not-superman-ness	0.00 (1)
8	to-be-looked-at-ness	0.01 (4)	33	not-normal-ness	0.00 (1)
9	un-self-consciousness	0.01 (4)	34	not-at-homeness	0.00 (1)
10	at-one-ness	0.01 (3)	35	non-right-handedness	0.00 (1)
11	out-of-dateness	0.01 (3)	36	no-thing-ness	0.00 (1)
12	up-to-dateness	0.01 (3)	37	no-self-awareness	0.00 (1)
13	at-home-ness	0.00 (2)	38	no-matter-what-ness	0.00 (1)
14	down-to-earthness	0.00 (2)	39	never-give-upness	0.00 (1)
15	grown-up-ness	0.00 (2)	40	know-it-all-ness	0.00 (1)
16	in-between-ness	0.00 (2)	41	life-in-deathness	0.00 (1)
17	in-synch-ness	0.00 (2)	42	letting-in-ness	0.00 (1)
18	love-in-idleness	0.00 (2)	43	larger-than-lifeness	0.00 (1)
19	ladder-to-one-ness	0.00 (2)	44	IT-self-awareness	0.00 (1)
20	meant-to-be-ness	0.00 (2)	45	in-your-faceness	0.00 (1)
21	non-zero-sumness	0.00 (2)	46	in-the-knowness	0.00 (1)
22	not-two-ness	0.00 (2)	47	in-charge-ness	0.00 (1)
23	out-of-touchness	0.00 (2)	48	holy-war-ness	0.00 (1)
24	over-the-topness	0.00 (2)	49	here-and-now-ness	0.00 (1)
25	self-puffed-upness	0.00 (2)	50	good-for-nothingness	0.00 (1)

COCA において出現頻度が 1 のものは、上記の表にある 22 例を含めて 155 例ある。この内、ハイフンを 2 つ含んでいるものには次のような例がある。

(15) 形容詞句

high-and-mightiness, ill-at-easeness, good-for-nothingness, larger-than-lifeness

(16) 複合名詞、名詞句

life-in-deathness, good-guy-ness, couch-potato-ness, holy-war-ness

(17) 前置詞句

in-your-faceness, in-the-knowness, in-chargeness, down-and-outness

(18) 動詞句

letting-in-ness, getting-on-ness, getting-in-shapeness, don't-know-vagueness, don't-know-knowingness, do-it-yourselfness

BNC では、上記の文字列でヒットする語は 26 件あるが、このうち、対象となる語は、以下の 16 例で、16 例中、最初の 2 例を除いて、すべて出現頻度は 1 回である。

- (19) up-to-dateness, down-to-earthness, happy-go-luckiness, honest-to-goodness, in-the-foot-ness, matter-of-factness, next-to-nothingness, old-school-ness, out-of-dateness, out-of-tuneness, over-the-topness, rock-star-ness, taken-for-grantedness, black-and-whiteness

3.4 *_*-*_ness_nn*

この文字列での検索では、COCA では 29 件、BNC では 6 件ヒットする。このうち、対象語に絞って、ハイフンを 3 つ含むものをそれぞれのコーパスからすべて挙げると次の通りとなる。角括弧の中の数字は当該の語の実際の出現頻度を表す。

COCA

- (20) stick-to-it-iveness [5], meant-to-be-ness [2], stick-to-it-ness [2], two-or-more sidedness [1], taken-it-for-grantedness [1], stick-

with-it-ness [1], stick-to-it-tiveness [1], salt-of-the-earthness [1], out-of-body-ness [1], on-the-job- effectiveness [1], on-the-bus-ness [1], on-the-ball-ness [1], not-quite-there-ness [1], no-matter-what-ness [1], know-it-all-ness [1], here-and-now-ness [1], fun-tosay-ness [1], being-in-the-worldness [1]

BNC

(21) never-say-die-ishness [1], matter-of-fact-ness [1], in-the-foot-ness [1]

3.5 *_*-*_*_*_ness_nn*

ハイフンを4つ含む文字列での検索でヒットする語は、*COCA* では次の3例、*BNC* では *COCA* でもみつかる *to-be-looked-at-ness* の1例のみである。

COCA

(22) to-be-looked-at-ness [4], stick-to-it-ive-ness [1], on-top-of-each-
otherness [1]

BNC

(23) to-be-looked-at-ness [1]

3.6 *_*-*_*_*_*_ness_nn*

ハイフンを5つ含む文字列での検索では、*COCA* では次の2例が、*BNC* では1例もヒットしなかった。

(24) I-can't-do-it-too-ness, get-me-out-of-here-ness

3.7 まとめ

以上、本節では、*COCA* と *BNC* におけるハイフンとワイルドカードを含む文字列の検索の結果をみてきたが、接辞 *-ness* の基体とその出現頻度について、次の3点が明らかになった。

(i) 出現頻度が最も高いのは、基体が単純形容詞または派生形容詞 (*effective*, *forgiveness*, etc.) の場合である。

(ii) (i) につづいて、複合形容詞 (*self-consciousness*, *short-sightedness*,

etc.) を基体とする派生語の出現頻度も高い。

(iii) 拡張タイプの *-ness* 派生語の中には、*nothingness*, *togetherness* のように出現頻度が高いものや、*matter-of-factness*, *stick-to-it-iveness* のようにある程度、繰り返し出現するものもあるが、出現頻度 1 のナンスワード的なものが圧倒的に多く、このようなナンスワードの中には名詞 (句)、形容詞 (句)、前置詞 (句)、副詞や文など様々な形を基体としてもつものが観察される。

出現頻度の観点からみて、派生接辞 *-ness* の基体となるのは、形容詞が中核 (core) であり、それ以外の要素は周辺部 (periphery) を成すといえる。

4. 接辞 *-ness* の拡張用法

この節では、周辺部を成す拡張用法に焦点を絞り、(i) 出現頻度が非常に高いもの (*nothingness*, *togetherness*)、(ii) 出現頻度がある程度みとめられるもの (*matter-of-factness*, *stick-to-itiveness*, *with-it-ness*)、(iii) 当該の文脈の中でその場限りの必要性を満たすナンスワードとして使用されているものに分けて、その意味や特徴を考察する。出現頻度数が高いもの、またはある程度認められるものについては、辞書の見出し語になっているかどうか、見出し語になっている場合には語義についても調査した。調査には英米語の二大辞書のオンライン版である *Merriam-Webster Dictionary Unabridged* と *Oxford English Dictionary Online* を使用した。

4.1 出現頻度が高い派生語

3.1 でみたように、*-ness* が形容詞以外の要素に付加していると思われる例で、出現頻度が非常に高い派生語 (出現頻度 50 位以内に入る語) は、*nothingness* と *togetherness* である。これらの語はアメリカ英語においてもイギリス英語においてもかなり定着している語であり、辞書の見出しにも記載されている。まず、*nothingness* は、*Webster*, *OED* のそれぞれの辞書で次のように定義されている。

Webster

- (25) 1: the quality or state of being nothing
 2: something that is utterly insignificant or valueless
 3: emptiness, void
 4: the conceptualization or reification of the affective content in an emotional experience (as of anxiety) that is negatively colored

OED

- (26) 1. a. the realm of non-existence; that which is non-existent.
 b. the state or condition of being non-existent.
 c. absence or cessation of consciousness or life.
 2. a. the futility or vanity of a thing or activity; the worthlessness or vapidness of.
 b. that which has no value or worth; the condition of being worthless or vapid.
 3. insignificance or unimportance.
 4. as a count noun: a non-existent thing, a void; a state of non-existence or worthlessness; a worthless, insignificant, or unimportant thing, action, etc.

上記の定義から、アメリカ英語でもイギリス英語でも *nothingness* には大きくって2種類の意味があることがわかる。「非存在(何も存在しない状態、性質)」の意味と「無価値(価値がない状態、性質)」の意味である。

実際に、COCA の中では、それぞれの語について、例えば、(27)－(28)のような用例が見つかる。なお、丸括弧に筆者の日本語訳を、角括弧に引用文献のジャンルを付す。

- (27) Frantically I reached for reins, but couldn't find them. My fingers felt thick and stiff. Useless. I screamed into the wind. I told the horse to stop but my words had no effect. # Then the mists shifted and drew apart and I saw that behind them lay only darkness.

A void of nothingness. It looked as though my steed and I were racing toward the edge of the world. [FIC]

(死に物狂いで手綱に手を伸ばしたが、とることができなかった。私の指は分厚くこぼばっているように感じた。だめだ。虚空に向かって叫んだ。馬に止まるよう言ったが、何の効果もなかった。そのとき、もやが晴れ、そのむこうにはただ暗闇のみが広がっていた。虚無の空間。馬と私はまるで世界の果てに向かって走っているかのようだった。)

- (28) Moltmann's version of theologia crucis particularly addresses postholocaust twentieth-century atheism: "In the broken mirror of an unjust and absurd world of triumphant evil and suffering without reason and without end it does not see the countenance of a God, but only the grimace of absurdity and nothingness." [ACAD]
(モルトマンによる十字架の神学ではとくにホロコースト後の 20 世紀の無神論について次のように述べている。「悪が勝ち、理由なき終わりのない苦しみの不条理で愚かな世界の壊れた鏡で、神の表情はみえない、愚劣で無価値だというしかめっ面しか。」)

上記の例において、*nothingness* の意味が異なることは、それぞれが「何もないこと」を表す *void*、「愚かさ」を表す *absurdity* と併記して使われていることからわかる。では、この 2 つの異なる意味はどのように派生したのだろうか。

「非存在」の意味は不定代名詞 *nothing* の意味から、「無価値」の意味は形容詞の *nothing* から派生したと考えられる。不定代名詞としての *nothing* が「なにもないこと」を意味するのはよく知られているが、*Webster* には、*nothing* が形容詞としての用法ももつことが記されており、その意味は次のように記載されている。なお、*OED* には *nothing* の形容詞としての項目がない。

- (29) *nothing*:

of no interest or importance

実際に COCA を調べてみると、次のような「無価値な、重要でない」を表す形容詞用法の例が見つかる。

- (30) Even if I stayed in Sam's place until he got back, I wouldn't have enough for first and last months' rent, for school, or even for someone to watch Tommy while I work. I hate Sam right now, and I see the years ahead, working at nothing jobs, telling Tommy, "No, we can't buy it," over and over. [FIC]

(たとえサムが帰ってくるまで彼の家にいたとしても、最初と最後の月の家賃すら満足に払えないし、学校に行かせるお金や私が仕事をしている間にトミーを預けるお金だって十分にない。サムは嫌いだし、このさきずっと何年も、つまらない仕事して、トミーには「それは買えないわ」って何度も何度も言わなければならないんだわ。)

「無価値」の意味を表す *nothingness* は形容詞用法の *nothing* に -ness が付加することによって派生したと考えられる。一方、形容詞用法の *nothing* には「非存在」の意味はないので、「非存在」の意味を表す *nothingness* は不定代名詞の *nothing* から派生したと考えるのが妥当である。

次に、*togetherness* についてみていく。この派生語は、*Webster*, *OED* では、それぞれ、次のように定義されている。

Webster

- (31) a state or feeling of closeness and happiness among people who are together as friends, family members, etc.

OED

- (32) 1. the state or condition of being together or being united; union, association
2. the fact of getting on well together or being well suited to one another; a sense of belonging together, fellowship.

どちらも「一緒に (いる)、ともに (ある)」といった連帯感の意味を含む。実際に *COCA* には次のような例がある。

- (33) At that time, with so many laws and social and cultural mechanisms against us, the motivating force to march was anger and resistance; the same mood that underpinned the original Stonewall Riots. HIV and AIDS, and the terrible tragedies accruing

from that pandemic, gave the marches another animating focus. # Sure, there was a feeling of celebration and an immense feeling of togetherness and belonging, but Pride -- not just the march, but the concept--was political, necessary, vital. [MAG]

(当時、私たちに反対する多くの法律や社会的、文化的仕組みがあり、デモ行進に駆り立てる力は怒りと抵抗だった。最初のストーンウォール暴動の根底にあったムードと同じだった。HIV、AIDS、その世界的流行から発生する悲惨な悲劇がそれらのデモ行進にもうひとつの原動力となる中心になっていた。もちろん、祝賀ムード大きな連帯感や所属意識はあったが、プライドは、単なるデモ行進だけでなく、そのコンセプトも、政治的であり、必要であり、きわめて重要なものであった。)

この場合、-ness の基体となった *together* の品詞は何かということであるが、*together* には副詞用法のほか、形容詞用法もあることが Webster, OED 両辞書に記載されている。それぞれの辞書における形容詞用法の定義は下記の通りである。

Webster

- (34) 1. appropriately prepared, organized, or balanced
2. composed in mind or manner

OED

- (35) 1. fashionable, up-to-date; hence used as a general term of commendation.
2. composed, self-assured; free of emotional difficulties or inhibitions.

上記の定義からわかるように、アメリカ英語においても、イギリス英語においても形容詞用法の *together* には、副詞用法の場合にみられるような「一緒に (いる)、ともに (ある)」の意味はない。形容詞用法の場合には、アメリカ英語でもイギリス英語でも「落ち着いた、冷静な」(ともに 2. の意味)を表す。アメリカ英語ではこの意味に加えて「しっかりした、分別のある」の意味 (1. の意味) で使われることがあり、また、イギリス英語では「おしゃ

れな、最新の」の意味（1.の意味）で使われることもある。形容詞用法の *together* に連帯感を表す意味がないのであれば、*togetherness* の基体は形容詞用法の *together* ではなく、副詞用法の *together* ということになる。形容詞用法の *together* から *togetherness* が派生することは可能だと思われるが、COCA や BNC の例を目視で確認した限り、該当例は今のところ見当たらない。

以上、COCA, BNC において出現頻度数が非常に高い派生語で、辞書にも記載されている *nothingness* と *togetherness* について、辞書による語義およびコーパスで見つかる実例に基づき考察を行った。これらの基体は品詞の観点からみると例外的（有標的）であるが、意味的には、不定代名詞の *nothing* も *void*, *empty* のような形容詞が表す意味をもち、また、副詞の *together* も *harmonious*, *united* のような形容詞が表す意味と結びつきやすい。接辞 -ness は、それぞれの語が生来持っている形容詞的な意味と結びつくことで、派生語を形成したのではないかと考えられる。

4.2 出現頻度が一定数ある派生語

次に、COCA において、複数の文献で複数回（5 回以上）の使用がみられたものについて考察を行う。（36）は普通名詞に、（37）は人称代名詞に、（38）は人称代名詞以外の直示（ダイクシス）表現、（39）は句に、-ness が付加したものである。

(36) stateness, boyiness, girliness, horseness, guyness, gameness,
buzzness, adulthood, groupness, humanness, airness, womanness

(37) I-ness, me-ness, we-ness

(38) thisness, thereness, nowness

(39) too-muchness, matter-of-factness, stick-to-itiveness, with-it-ness,
taken-for-grantedness, down-to-earthness, just-so-ness

Webster を調べたところ、見出し語にあるのは、（36）の中では womanness のみで、（37）の語はいずれも見出し語にはなかった。一方、（38）の語はすべて見出し語として記載があり、（39）は見出し語として記載があるもの（*too-muchness*, *stick-to-itiveness*）、見出し語として記載されているわけではないが派生語として辞書に記載があるもの（*matter-of-factness*, *down-to-earthness*）、

見出し語としても派生語としても辞書に記載がないもの (*with-it-ness*, *taken-for-grantedness*, *just-so-ness*) がある。以下、4.2.1-4.2.3 では、基体の要素のタイプごとに、基体が名詞の場合、直示 (ダイクシス) の場合、句の場合に分けて、辞書の見出し語としての記載の有無、意味、使用されているコンテキスト等について考察する。

4.2.1 名詞の場合

名詞に *-ness* がつく場合は、上記の *womanness* を除いて Webster でも OED でも見出し語としての記載がない。見出し語となっている *womanness* の定義は “*womanliness*” となっているが、このように名詞を語根として *-ness* 派生語を形成する場合、語根である名詞に *-ness* が直接つくのではなく、*-ful*, *-ish*, *-like*, *-some*, *-y* などの接辞によりいったん形容詞化された要素つくのがふつうである。例えば、*girl* を語根とし、*-ness* で終わる語を抽出するために、「*girl*ness*」という検索文字列を使って COCA を検索すると、出現頻度順に *girlishness*, *girliness*, *girlness*, *girl-ness* の 4 通りの形が得られる。ハイフンがあるかないか (*girlness*, *girl-ness*) は表記の問題であり、意味的な差はないと考えられるが、形容詞化接辞を含む *girlishness*, *girliness* と名詞に直接 *-ness* がつく場合で、どんな意味的な違いがあるのだろうか。COCA から抽出された下記の例を比較してみよう。

(40) The coverage of women's gymnastics has a long tradition of emphasizing the contrasts of its competitors: traditional girlishness on the one hand, traditionally masculine qualities -- "power" chief among them -- on the other. [MAG]

(41) Cheeks still bulging, Posey nodded. Could she look any more ridiculous? Not that she was exactly gifted with girliness when it came to clothes -- her work required sturdy stuff, so, sure, there was a lot of flannel, a lot of Carhartt. But even that would be better than her uniform (same one from high school, still regrettably roomy in the bust, as Germans didn't take small chests into account when designing clothes, apparently). [FIC]

(42) When he looked at any grown woman now, he saw the child, the shirtless girl in the backyard rolling in chiggers and laughing or the scared pajamaed one in the middle of the night or the almost teenager throwing her milk cup in anger and watching astounded as the impact turned it to pieces. He thought being surrounded by all that girlness for all those years would help him better understand them, but it left him even more mystified. [FIC]

(40) の *girliness* からは女の子がもつステレオタイプのな特徴（男性の力（power）に対する女の子の弱さ、等）が想起され、(41) の *girliness* は、若い（幼い）女の子が好みそうなかわいい服装が想起される。これらの語は形容詞化接辞の *-ish*, *-ly* を含むことで、「女の子らしい」「女の子に特徴的な」「女の子にふさわしい」といった接辞のもつ意味ももつと考えられる。とくに、*-ly* は指小辞（diminutive）として使われることもあり、軽蔑的（derogatory）な意味と結び付けられて解釈されることもある。

これに対して、(42) の *girlness* は名詞に直接結びつくことで、形容詞化接辞の意味を含まない。Bauer et. al. (2013:261) は、*-ness* が名詞に直接つく場合の派生語全体の意味について、次のように述べている。

(43) In its capacity to attach to nouns or to whole phrases or sentences, *-ness* does not so much denote the state or condition of being the kind of entity denoted by the noun; rather it highlights or picks out the significant characteristics that make that entity what it is, denoting abstract quality or state of those characteristics.

つまり、名詞やその他、句や文に付加する *-ness* には、基体の名詞や句によって表されるもの（entity）を本質的に特徴づけるのに重要な役割を果たす特徴そのものを強調したり、抽出したりする働きがある、ということである。上記の *girlness* の場合は「女の子」を「女の子たらしめている特質そのもの」ということになる。具体的にその特質が何であるかは文脈によるものと思われるが、これについては 4.3 で考察する。

4.2.2 直示（ダイクシス）の場合

上でみたように、コンテキストに依存してその意味が決まる、いわゆる直示（ダイクシス）として通常、使われる要素に *-ness* が付加している場合がある。*I, me, we* のような一人称代名詞、*here, there, now* のような空間表現や時間表現、*this* のような指示詞に *-ness* が付加した例である。このうち、*hereness, thereeness, nowness, thisness* は辞書の見出し語にもあり、*Webster, OED* での定義は下記の通りとなっている。

Webster

- (44) a. *hereness*: the state of being here
- b. *thereeness*: the condition of being there in position: presence in a place distinguishably there not here
- c. *nowness*: the quality or state of existing or occurring in or belonging to the present time
- d. *thisness*: the quality in a thing of being here and now or such as it is : the concrete objective reality of a thing

OED

- (45) a. *hereness*: the fact or condition of being here
- b. *thereeness*: the condition or quality of being there; existence in a defined place. (Sometimes opposed to *hereness*.)
- c. *nowness*: The state, fact, or quality of being now
- d. *thisness*: The quality of being 'this' (as distinct from anything else)

まず、*hereness, thereeness* については、*Webster, OED* どちらの辞書も共通に「その場に存在すること」を意味するとしている。例えば、実際に COCA に次のような例がある。

- (46) As a result of the intimate and obligatory union of space and time, the terms “temporalization of space” and “spatialization of time” have surfaced in scientific, philosophical, and literary studies. The first implies that consciousness is “out there” in the universe and that our total experience is reduced to what is called “being-time.”

To help us understand this expression, Wolf uses equivalents like “hereness” and “our sense of presence.” [ACAD]

- (47) In any case, she had detached herself from me, and I felt her absence as surely as I had once felt her thereness, her everness, her absolute and indestructible love. (If a love dies, how can such love be love? By what linguistic contrivance?) [FIC]

(46) の *hereness* は “our sense of presence (存在しているという感覚)” と同等のものとして扱われている。また、(47) の *thereness* は “absence (存在しないこと)” と対比されている。こうした文脈からもわかるように、*hereness*, *thereness* は「特定の場所を指してその場に存在すること」を意味するのではなく、「抽象的な存在」を指すものと考えられる。

同じようなことは他の直示表現が -ness に付加した場合についても言える。COCA から引用した *thisness*, *nowness* の例をみてみよう。

- (48) On the contrary, singularity exists outside of the alternative between universal types and particular individuals. Deleuze finds in Simondon a cogent formalization for an ontology of singularity. Being, says Simondon, is non-un (“not-one”) . On the other hand, it is not nothing either. Rather it is nonnullus, as the Latins say: not-nothing, i.e., something, someone. But what? To begin with, nothing but a ‘this’ which exists by virtue of its ‘thisness,’ of its being such, as Medieval ontology refers to it: haecceitas, says Duns Scotus, from haec (‘this thing’) . [ACAD]

- (49) She slowly walks downstage. It takes about six minutes long. And she sits at a table and drinks a cup of coffee. And I guess what I was trying for with that is to say that we can search all over the world and we're always questing and suffering and struggling, but basically the *nowness*, the immediacy of really appreciating a good cup of coffee, which I think is real important, or something as simple and fundamental as that is basically what all the striving is all about.

(48) において *thisness* はヘクセイタス (*haecceitas*) と同等の意味をもつとされている。

ヘクセイタスとは哲学用語で「ある個体を別の個体と区別してその個体たらしめている特質」を指し、発話の時点で目の前にある特定のものの特徴を指すのではなく、個体一般を指し、それを別の個体と区別する特徴のことを指す。また、(49) における *nowness* は “*immediacy*” に置き換えられていることからわかるように、発話の時点（特定の時点を指すのではなく、抽象的に「即時性」を指す。

一人称代名詞に *-ness* が付加している例 *I-ness*, *me-ness*, *we-ness* は、*Webster*, *OED* のどちらの辞書にも見出し語としての記載がないが、ほかの直示表現の場合と同じように、特定の人（発話者または発話者を含む特定の人）を指すのではないことは *COCA* から引用した下記の例からも分かる。

(50) Specifically, the writers' I-ness (or presence in their texts as authors of ideas taking responsibility for their claims and openly implicating themselves as sources of knowledge) was born in a nexus of relationships, in concert with and in conflict with a number of conversational or " dialogic " partners. [ACAD]

(51) I had expected, when I became a father, that there would be changes in my life-reallocations of time, reassessments of priorities, even blossomings of unprecedented tenderness. But I hadn't expected a mutation of my very nature, what I took for granted as being essential to my me-ness. I also found myself being challenged in other realms of perception and belief. [MAG]

(52) … as it increases the likelihood of developing mutually satisfying win-win relationships, compatibility can encouraging the partners feeling of “we-ness” among organizations, … [ACAD]

(50) の *I-ness* における一人称代名詞 *I* は話し手または書き手を指すわけではない。このことは所有格形 *the writers'* に修飾されていること、後続する丸括弧内の語義説明に *author* を指すことが示されていることから分かる。特定の人ではなく抽象的な「自己、自身」を表すものと考えられる。同

様に、(51) の *me-ness* における *me* は直前の *my* (話し手または書き手) を指すわけではなく、先行文脈にある “*my very nature*” (自己の本質) を表すものと考えられる。(52) の *we-ness* における代名詞 *we* も話し手 (書き手) を含む特定のグループを指すわけではなく、抽象的な仲間意識を表すものと考えられる。

以上、直示的に使われる表現に *-ness* が付加している例をみてきた。いずれの場合も *-ness* が付加した場合は、特定のものや人の特性を表すのではなく (直示的に使われているのではなく)、「存在」「個性」「即時性」「自己」「仲間意識」といったそれぞれの表現に関連した抽象概念を表すことが文脈から分かる。

4.2.3 句の場合

句に *-ness* が付加している例で、一定の出現頻度が認められるものには次のようなものがある。

- (53) *too-muchness, matter-of-factness, stick-to-itiveness, with-it-ness, taken-for-grantedness, down-to-earthness, just-so-ness*

このうち、*Webster* で辞書の見出し語としての記載があるのは *too-muchness* と *stick-to-itiveness* である。それぞれの定義は下記の通りである。

- (54) *too-muchness*: the quality or state of being excessive

- (55) *stick-to-itiveness*: dogged perseverance

また、*matter-of-factness* と *down-to-earthness* は、独立した見出し語としての記載はないが、基体である *matter-of-fact, down-to-earth* は見出し語として記載されており、その派生形として *-ness* 形についての言及がある。

このように、形も辞書における記載方法も様々であるが、上記のような拡張用法に共通して言えることは、基体の意味が「性質」や「状態」を表し、形容詞的な意味をもつということである。形容詞句が固まって一語化した場合 (*too-much, just-so*) と形容詞句以外の形をしていてもイディオムとして形容詞的な意味をもつものの2種類があり、後者の例とその *Webster* による定義は下記の通りである。なお、いずれも品詞は形容詞とされている。

- (56) *matter-of-fact*:

1. adhering to or concerned with fact: not fanciful or imaginative

2. free from show or affectation

(57) down-to-earth:

1. practical and straightforward: having no frills or foibles

2. easy to relate to or communicate with in spite of success or fame: not pretentious

(58) with-it:

socially or culturally up-to-date

これらはどれも句の形をしているが、慣用的に 1 つの形容詞相当の語としての意味をもつことにより -ness 接辞の付加が可能になったと考えられる。

4.3 ナンスワード

上で述べたように、-ness は非常に生産力の高い接辞であり、その生産性の高さはそれによってつくられる派生語の数、とりわけナンスワードの数によっても示される。*ness の検索文字列でヒットする 6,316 タイプのうち、実に約半数の 3,157 タイプが頻度 1 回のみのナンスワードであった。このようなナンスワードの中には、実に様々な形のものみられる。形容詞句、名詞句、前置詞句、動詞句など様々な形をしたものがあり、こうした句の中にはイディオムとして慣用的に使われるものも少なくない。例えば、次のような例が COCA で見つかる。

(59) Some people are gift savants. They just look at you and instantly know the one present that will make you beam and leap up to hug them after you open it. I am not one of those people. I generally remember gift-giving occasions six weeks early, congratulate myself on my on-the-ball-ness, then promptly forget until the day before. [MAG]

(60) This is Mr. Drabinsky's style, big-talking, grandiose, even hubristic ... "At the root of everything is my interest in maintaining harmony in the collaborative process," he said. #But comments about his larger-than-lifeness are hard to avoid, ... [NEWS]

上記の例において、-ness が付加している on the ball, larger than life はともにイディオムであり、Webster によれば、それぞれ次のような慣用的意味をもち、いずれも意味は形容詞的である。

(61) on the ball (slang) : knowledgeable and competent, purposively active

(62) larger-than-lifeness:

1. larger than the size of the actual person or thing represented
2. extraordinarily memorable, impressive, powerful, or successful: of the sort legends are made of

他に慣用的に形容詞的な意味をもつ前置詞句や形容詞句に -ness が付加した例としては、*in-commonness, in-placeness, in-shapeness, at-hominess, at-largeness, at-onceness, out-of-bodyness, in-the-knownness, good-for-nothingness* などもある。

ナンスワードの中には、慣用句ではない名詞や名詞句に -ness が付加している例も多数みつける。例えば次のような例である。

(63) 名詞

art-ness, boy-ness, guy-ness, past-ness, pc-ness, power-ness, ring-ness, star-ness, Joe-ness, Romeney-ness, L.A.-ness, Africa-ness, 2000s-ness

(64) 名詞句

good-guy-ness, every-dayness, other-timeness, life-in-deathness

4.2.1 でも述べたように、-ness が名詞につく場合には、名詞によって表されるものを本質的に特徴づけるのに重要な役割を果たす意味を強調したり、抽出したりする働きがあると考えられるが、-ness がとりたてて本質的特徴の意味がそもそも基体の名詞の意味の中に存在しているものとは考えにくい。とくに、上記の例にある *L.A., Africa, Swiss* などの特定の地名を表す固有名詞や *2000s* のような特定の年代を表す名詞の中にとりたてられるべき特質の意味が備わっているとは考えられない。これらの名詞は他の固有名詞や代名詞と同じく、特定の意味内容を表すというより、特定のものを指し示すという指示機能の強い語である。従って、名詞の意味内容の中に -ness が結びつ

く特質を表す意味があるというよりもむしろ、-ness が付加することにより基体の名詞によって表されるものがもつ社会的、文化的背景や当該の語が使用されている文脈などの語用論的に可能な意味をとりたてる効果があると考えるのが妥当だろう。上記の例にある *Africa-ness* と *2000s-ness* の意味をそれが使用されている文脈の中で考えてみよう。

- (65) Derived from the well-known cross of Agadez (teneghalt tan Agadez) but made by a Fulbe goldsmith in Mali's capital of Bamako, this work and others like it show the significant influence Tuareg design has today on other artists and artisans. In fact, the cross of Agadez has become one of the few design forms immediately identifiable with West Africa and is used as a motif by non-Tuareg on stamps, currency, and signs to denote "Africa-ness."
[ACAD]

- (66) In 2006 we are still in the "jeans and a going-out top" era. Spaghetti straps are in, and I can't understand how any of these women's breasts are being supported. Lori makes a rather unfortunate hat choice which sets the stage for so many awful hats to come in this franchise. Jo wears the Chanel sunglasses that every cool rich girl in my area got for their birthday. # Advertisement # Still, underneath the early 2000s-ness of it all, its easy to pick up on the very questionable taste of these women and this county's inexplicable penchant for horrible, awful jewelry.
[MAG]

(65) の *Africa-ness* は「アフリカの本質、特質」を、(66) の *2000s* は「2000年代という時代の本質、特質」を表すが、それぞれの特質が具体的にどのようなものであるかということは構成要素である基体と接辞の意味だけでは推測できず、前後の文脈から得られる情報が必要となる。少なくとも、(65) はアフリカの特質をデザインの観点から、(66) は 2000 年代の特質をファッションの観点から特徴づけていることが文脈から分かる。

同様のことは名詞句の場合についても言える。ナンスワードの解釈には語

を構成する要素の意味だけではなく、文脈上の情報が不可欠である。例えば、上に挙げた *other-timeness* は実際には次のような文脈の中で使われている。

(67) I stopped my rented Dacia outside a village in the heart of Romania's Carpathian Mountains, a part of the world better known as Transylvania. The lush green hills dotted with mounds of hay, the neatly tended pastures -- in fact, the complete absence of anything modern -- created a sense of other-timeness, of being flung backward a hundred years to an era before the roar of planes and the stench of automobile exhaust. [MAG]

(67) において、*other-timeness* は「近代的なものの何一つないトランスバニア地方の様子（青々とした緑の丘陵地のところどころに干し草の山が詰め、手入れの行き届いた牧草地のある風景）」を描写する表現として使われ、*other-time* が具体的には「飛行機の轟音や車の排気ガスなどまだない 100 年前の時代」を指すことが前後の文脈から分かる。

文脈が解釈の鍵となることは、名詞、名詞句以外の要素についてもあてはまる。例えば、次のような命令文や平叙文の形をした要素に *-ness* が付加している場合をみてみよう。

(68) Though people enjoy coming to Vegas, what they really love is leaving. Every other passenger waiting to board a flight out of Vegas wears that same telltale look of fatigue, remorse, heatstroke and get-me-out-of-here-ness. [MAG]

(69) But you wouldn't know it to feel the jubilant fever of this crowd. A single pin goes down and the students cheer, a jagged flurry of high-fives all around. # Hudson looks on, smiling. This is what it's all about - this sense of empowerment, of I-can-do-it-too-ness. [NEWS]

(68) の *get-me-out-of-here-ness* は、ラスベガスに来た旅行者が空港で帰りの飛行機を待つ間の様子を表したものである。先行文脈に “Though people enjoy coming to Vegas, what they really love is leaving.” があることで、“Get me out of here!” が「ラスベガスから出してくれ」の意になることは明らかである。また、“that same telltale look of fatigue, remorse, heatstroke”（皆

同じ、それとみてわかる疲れ、後悔、熱中症の様子を浮かべていること）が続くことで、その様子や理由がさらに詳しく描かれている。当該の派生語はこのような先行文脈があってはじめて自然に解釈される。(69) の *I-can-do-it-too-ness* も同様である。先行文脈に “the jubilant fever of this crowd” (群衆の歓喜の様子) が描かれている。その様子は、“A single pin goes down and the students cheer, a jagged flurry of high-fives all around.” (学生たちがほんのちょっとしたことで喜び、互いにハイタッチする様子) でさらに詳しく描かれ、当該の語が「自分もできる」という喜びの感覚を表すことは、直前の “this sense of empowerment” (エンパワメントの感覚) の述べかえになっていることから分かる。

5. まとめ

本稿では、接辞 *-ness* を含む派生語を COCA と BNC から抽出し、主に、*-ness* が形容詞以外の要素に付加している拡張用法について、その出現頻度や特徴について考察した。拡張用法の中には *nothingness*, *togetherness* のように出現頻度が高く、辞書に見出し語として記載されるようになっているものや *matter-of-factness*, *stick-to-it-iveness* のようにある程度の出現頻度がみられるものもあるが、多くは出現頻度が 1 ～ 2 回のナンスワードである。

出現頻度、辞書の見出し語としての記載の有無に関わらず、基体の要素が (i) 形容詞的な意味を含んでいる場合、(i) 品詞転換またはイディオム化 (語彙化) することで形容詞的な意味をもつようになった場合、(ii) 文脈から性質や状態の意味が推測される場合に拡張用法が可能になることをみた。接辞 *-ness* に課される制約がどのようなものであるか、基体の意味の拡張を可能にするプロセスとはどのようなものか、に関する具体的な分析案については今後の検討課題としたい。

参考文献

- Bauer, Laurie (1983) *English Word-formation*, Cambridge University Press.
- Bauer, Laurie (2014) "Concatenative Derivation," Rochellie Liever and Pavol Stekauer (eds.), *The Oxford Handbook of Derivational Morphology*, Oxford University Press.
- Davies, Mark (2017) *The Corpus of Contemporary American English (COCA) : 560 million words, 1990-present*. Available online at <https://www.english-corpora.org/COCA/>.
- Davies, Mark (2004) *British National Corpus* (from Oxford University Press). Available online at <https://www.english-corpora.org/BNC/>.
- Merriam-Webster Unabridged* (2016), Merriam-Webster.
- Oxford English Dictionary Online* (2019), Oxford University Press.